

太一の海

平野ますみ／作 池田仙三郎／画



太一の海

創作こどもらいぶらり 8

1972年11月／発行©

著者／平野ますみ

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社 **金の星社**

東京都台東区小島 1 丁目 4 - 3

電話／東京03-861-1506 (代表)

振替／東京64678

写植／松竹写植

製版／株式会社トープロ

印刷／熊谷印刷株式会社

製本／株式会社小林製本所

乱丁落丁本はおとりかいたしますので、お
求めの書店または本社へお申し出願います。

913 平野ますみ
太一の海

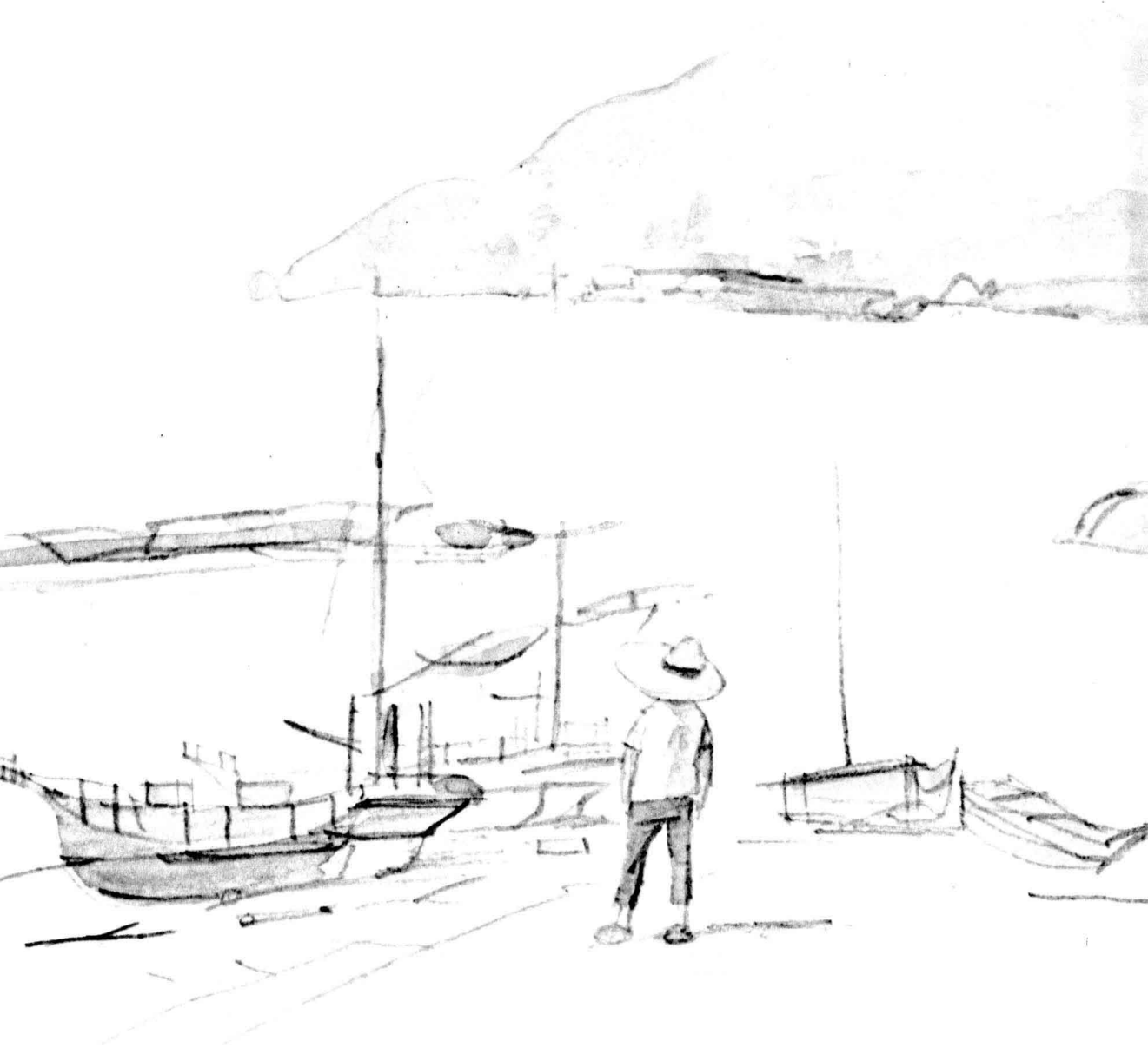
金の星社 1972
83P 22cm

基本カード記載例

8393-033081-1406

太一の海

平野ますみ／作 池田仙三郎／画



もくじ

ガラスの破片はへん

8

民宿みんしゆくの村

17

勇平ゆうへいの詩し

24

かあちゃん

36

三つの岩いの伝説でんせつ

43

どろぼう退治たいじ

48

民宿みんしゆく村むらの秋

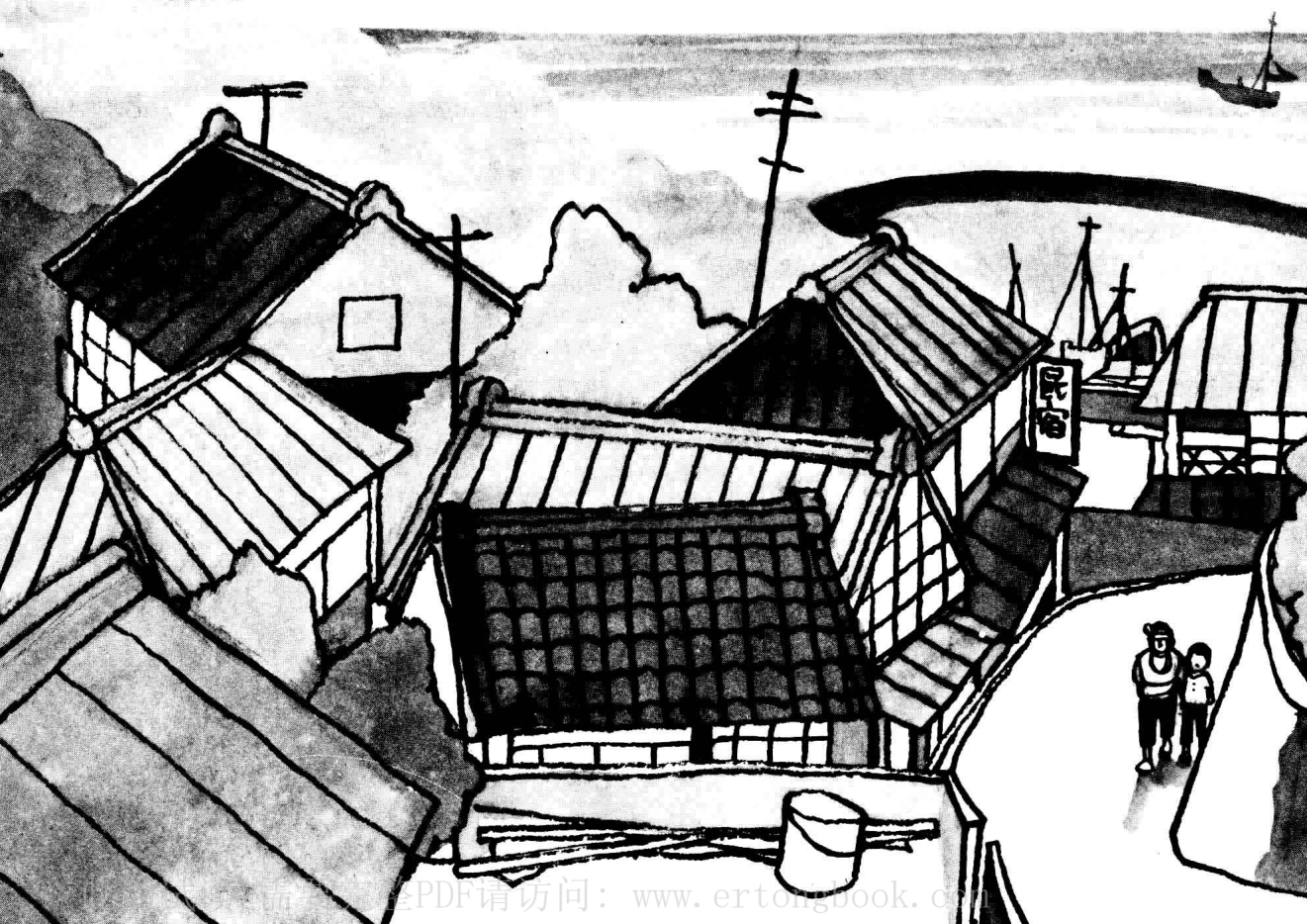
66

太一の海

73

あとがき

82







■著者紹介



平野 ますみ
ひらの

一九三一年静岡県に生まれる。少女時代から文学書を読み、結婚後、長男をおんぶしながら書いた童謡集『春のかくれんぼ』によって第四回新美南吉文学賞を受賞。日本童謡協会、静岡県詩人会々員。

現住所・静岡市上足洗四六

七の一

■画家紹介



池田 仙三郎
いけ せん さぶろう

一九二四年横浜に生まれる。絵を川端画学校および、パリのアカデミージュリアンに学ぶ。版画の世界をおもわせる独特な作風を築きあげ、現在、装幀・さし絵等の仕事で活躍している。作品に『遠くなった海』等がある。

現住所・東京都日野市日野

台二の三七

太一の海

平野ますみ 作

池田仙三郎 画



ガラスの破片^{はへん}



「よう、じいちゃんよう。ようつてば、よう……。
じいちゃん、きこえねえのけ。」

じいちゃんは、^{たいち}太一に背をむけたまま、イシダ
イ針^{ばり}（^{四十センチもあるタイ}をつる大きなつりばり）の先を^{さき}しらべている。

めがねが、はなの上からずり落ち^おそうだと。

「じいちゃん、よう——」。

「太一、いつまでも、じいちゃんをこまらずでね
え。四年生にもなって、なして、そうわからずだ。」

じいちゃんのかわりに、^{だいごろう}台所で^{まめ}豆のかわを
むいていたかあちゃんが、太一をどなった。

「ちえつ。おら、かあちゃんなんぞに、なあんも
いってね。」

太一は、どてーんと、たたみの上にひっくりか
えった。

じいちゃんが、めがねの下から太一を見た。じ
いちゃんの目は、なんともいえない、やさしい目

をしている。

じいちゃんは、いまでも元氣に沖へ出る。村の人たちは、じいちゃんのことを、変人だ、がんこ者だ、いじっぱりだという。でも、太一は、じいちゃんがすきだ。じいちゃんは、ほんとうは、心のやさしい人なのだと、太一はおもう。

むかし、じいちゃんはクジラとりの「ハザシ」だった。

ハザシというのは、クジラ舟にとりかこまれ、鉈を打たれて弱りはじめたクジラの背中に、ふんどし一つで飛びのり、クジラのはなを、鉈で切りきざむ、危険で、勇ましいしごとだ。

シロナガスクジラや、ゴンドウクジラに、一番鉈をさしたときの話を、太一は、じいちゃんから、いくどもいくども聞いた。

「ハザシの一番鉈ほど、男らしいしごとあねえ。」

じいちゃんは、むかしの話をするとき、きまって、ふしくれだった太一両手を、ぐつとにぎりしめる。勇ましかったクジラとりの、いなくなってしまうことが、残念でたまらないのだ。

「太一、小浜へ行ってけえ。英治ら、まってるんだ。」



かあちゃんか、また台所から声をかけた。

「おら、いかね。」

「なして、いかね？」

「へんっ。」

太一は、なんとしても気にいらぬのだ。

（うそつき野郎！ おとなのうそつき野郎！）

たたみにひっくりかえって、ぷりぷりおこってみても、だれもあいてにしてくれない。

太一は、びく（魚かごと） つり竿をもつて、外へ出た。

「どうせ、つれやせん。」

太一は、のろのろと、小浜にむかう石段をおりていった。

石段の左がわに、村の天然記念物に指定されている、浜木綿の葉のみどりがひろがり、そのむこうに、白かべの土蔵が、鉄の格子戸をあけたままたつている。

英治の家えいじの土蔵だ。

太一は、英治の家によってみようとおもったが、やめた。

（おもしろくねえときは、一人がええ。）

てんぐ岩の上では、もう英治と勇平らしいすがたが、沖にむかつて、すわっているのが見えた。

「ちえっ！」

太一は、くると向きをかえると、てんぐ岩とは反対の岬のほうがくへあるきだした。

「どうせ、つれやせん。」

もう一度、太一はつぶやいた。

「どうせ、つれやせん。」

このごろ、めつきり魚の数がへってしまった。とれすぎてこまった、フグやボラまでが、沖へ舟を出さなければ、針にかからなくなっていた。



太一はつり竿さおをかついで、のつとりのつとり、浜はまをあるいていった。そのとき、目の前にキラリと光るびんの破片はへんを見た。立ちどまって、ズックのくつ先でほってみると、サイダーびんのかけらだ。太一は、ふつと、美代子みよこのことをおもった。

教室きょうしつでとなりの席せきにいる美代子が浜はまでころんだひょうしに、コーラのびんの破片はへんを、ひたいにつきさし、十針はりもぬう大けがをしてから、もう五日目になる。

「女の子だから、きずがあとに残のこつたら、たいへんだわ。」



と、受持^{うけもち}のあや子先生^{せんせい}も心配^{しんぱい}していた。

あの日、太一^{みよこ}、美代子^{みよこ}、勇平^{ゆうへい}、英治^{えいじ}の四人は、学校の帰り^{かえ}にいつしよだった。
「浜^{はま}をとおつて、帰るか。」

太一がいうと、

「うん、そうしよ、そうしよ。」

みんな、太一にさんせいした。

「ここ、美代ちゃんちの、売店^{はいてん}たつところやな。」

英治^{えいじ}が、両手をひろげて、古ぼけた磯舟^{いそふね}（海岸^{かいがん}の近くで魚^{いそ}をとる小舟^{ふね}）のおいてあるところを
さした。

「そうよ。ここ、あたしんちの売店よ。」

そういつて、美代子がかけた。そのとたん、石につまずいて、美代子
はころんだのだ。

美代子のひたいから、まっかな血^ちがあふれた。

太一は、美代子のランドセルの背中^{せなか}を、おこしてやった。勇平と英治^{えいじ}
あみほし場まで走っていつて、五郎屋^{ごろうや}の常兄^{つねにい}をひっぱってきた。

太一は、美代子がころんで、ひたいから血を流したとき、

「へっ、ばっち（ばち）が、あたったんや。」

と、おもった。

夏、美代子（みよこ）の家で、浜（はま）に売店（はいてん）を出すようになってから、浜（はま）がきたなくなってきた。

まえには、びんの破片（はへん）や、かんづめのあきかんや、アイスクリームのあき箱（はこ）などが、浜（はま）にちらばっていることなどなかった。

村（むら）に民宿（みんしゆく）ができ、美代子（みよこ）の家で、浜（はま）に売店（はいてん）を出したりするから、浜（はま）がよごれていく。

このごろでは、あぶなくて、はだしで浜（はま）をあるくこともできない。

「へっ、ばっちが、あたったんや。」

太一（たいつ）は、美代子（みよこ）のひたいの血（ち）を見ながら、はじめ、そう考えた。

けれども、勇平（ゆうへい）と英治（えいじ）が、あみほし場（ば）へ走（は）っていき、美代子（みよこ）と二人（ふたり）きりになったとき、きゆうに、そう考えたことがおそろしくなってきた。

「美代（みよ）ちゃん、いてえか、しつかりしなよ……」

「うん。」

美代子（みよこ）は、くちびるを、きゅっとかみしめて、目（め）をとじている。